

「あらしのよるに」木村裕一、講談社

「폭풍우 치는 밤에」 韓国語版訳

썩썩 비바람이 거세게 몰아쳤습니다. 물을 퍼붓는 것처럼 비가 내렸습니다. 한밤중에 내리는 세찬 비가 자그마한 염소를 힘껏 후려했습니다.

하얀 염소는 언덕을 미끄러지듯이 가파스로 내려와서, 금방이라도 부서질 듯한 작은 오두막으로 기어들었습니다.

염소는 깜깜한 어둠 속에 몸을 누이고
폭풍우가 그치기를 가만히 기다렸습니다.
덜컹! 오두막 안으로 누가 들어왔습니다.
헉. 헉. 숨을 거칠게 몰아쉬고 있었습니다.
누구일까? 염소는 숨을 죽이고 가만히 귀를 기울였습니다.

또각 직, 또각 직. 한 걸음 한
걸음 단단한 걸로 바닥을
두드리며 다가왔습니다.
발굽 소리였습니다. 뭐지?
그렇다면! 염소가 틀림없어.
염소는 마음을 놓고 말을
걸었습니다.

“비바람이 정말 대단하지요?”

“아이고! 이런, 실례했습니다. 깜깜해서
누가 있는지도 몰랐어요.” 상대는 좀
놀랐는지 거친 숨을 몰아쉬며
대답했습니다.

“괜찮아요! 저도 지금 막 들어왔는걸요.”

“글쎄 말입니다. 게다가 전 발목까지 빼어서……

참 큰일이야.” 상대는 그제야 겨우 큰 숨을
내쉬고

지팡이 삼아 짚고 온 작대기를
바닥에 내려 놓았습니다. 그렇다면
혹시?

맞아요. 지팡이를 짚고 들어온 검은 형체는 염소가 아니라
바로 늑대였습니다. 게다가 이 늑대는 이빨이 날카롭고,
염소 고기를 가장 좋아했습니다. “당신이 와서 마음이
한결 놓이네요.” 염소는 상대가 늑대라는 걸 아직
눈치채지 못했습니다.

“이렇게 비바람이 몰아치는 밤에 이런 오두막에 혼자 있었다면,
나라도 좀 불안했을 거예요.” 늑대도 상대가 염소인지
몰랐습니다.

“가만, 음, 아야야야.”

“왜 그러세요?”

“아닙니다. 이리로 올 때 발을 좀 다쳐서……”

“어머, 큰일이네요. 이쪽으로 다리를 뺏으세요.”

“그럼, 실례 좀 할게요.”

늑대가 다리를 뺏자, 염소 허리에 늑대 발이 와
닿았습니다. ‘아니? 발굽치고는 꽤 보드럽네!’ 염소는
이런 생각이 들었지만, 허리에 닿은 게 틀림없이 상대의
무릎일 거라고 생각했습니다.

“에, 에, 에, 옛취!”

갑자기 늑대가 크게 재채기를
했습니다.

“괜찮으세요?”

“어휴, 아무래도 코감기가 왔나 봐요.”

“저도 그래요. 덕분에 냄새를 통 못 맡아요.” “하하하,
그리고 보니 우리가 서로 아는 것은 목소리뿐이군요.”

“하하하, 정말 그러네요.”

상대의 웃음소리를 들은 염소는 언뜻
'늑대처럼 목소리가 탁하고 굵네요.' 하고
말하려다가 예의가 아닌 것 같아서 입을
다물었습니다.

늑대도 '무슨 웃음소리가 염소 웃음소리처럼 그렇게 높아요?' 하고 말하려다가, 상대가
기분 나쁠 것 같아서 그만두었습니다.

오두막을 때리는 빗소리와 울부짖는 바람 소리가 뒤섞여 울려 퍼졌습니다.

“그런데 어디 사세요?”

“으음, 전 덩석덩석 골짜기 쪽에 살아요.”

“네? 덩석덩석 골짜기요? 거기 위험하지 않아요?” “그런가요?
조금 험하긴 하지만 살기에는 괜찮습니다.” 덩석덩석 골짜기는
늑대들이 사는 곳입니다.

“어머, 배짱이 참 두둑하시네요. 전 산들산들 산 쪽에 살아요.”

“네? 참 부럽네요. 거기에는 맛있는 먹이가 많지요?” 맛있는
먹이란 염소를 말하는 것이었습니다.

“뭘, 그저 그렇죠. 하하하.” 그 때 둘의 뱃속에서
동시에 꼬르륵 소리가 났습니다.

“그리고 보니 배가 고프네!”

“정말. 저도 배고파요.”

“아, 이럴 때 맛있는 먹이가 가까이 있었으면……”

“그렇게 말이에요. 저도 지금 똑같은 생각을 하고 있었어요.”

“전 산들산들 산의 말랑말랑 골짜기 근처로 먹이를 구하러 자주 간답니다.”

“어머, 별일이네요. 저도 거기 자주 가요.”

“거기 먹이가 별나게 맛있지 않아요?”

“네, 냄새도 좋고요.”

“부드럽기도 하지만 씹는 맛도 그만이지요.”

“날마다 먹어도 질리지 않을 정도예요.”

“정말, 한번 맛을 보면 안 먹고는 못 배긴다니까.”

“맞아요. 생각만 해도 입 안에 침이 고이네요.”

“아유, 실컷 먹었으면……”

그러면서 동시에

“그 맛있는……”

“풀” 이라고 염소가 말했고,

“고기” 라고 늑대가 말했습니다.

하지만 마침 멀리서 우르르 하고 천둥이 쳐서,

그만 말끝이 묻혀 버리고 말았습니다.

原文

「あらしのよるに」

ごうごうと

たたきつけてきた。

それは『あめ』というより、おそいかかる
みずの つぶたちだ。あれくるった よるの
あらしは、その つぶたちを、ちっぽけな
ヤギの からだに、みぎから ひだりから、
ちからまかせに ぶつけてくる。

しろい ヤギは、やっとの おもいでおかを す
べりおり、こわれかけたちいさな こやに も
ぐりこんだ。

くらやみの なかで、ヤギは からだを やすめ、
じっと、あらしの やむのを まつ。

ガタン!

だれかが こやの なかに はいってくる。

ハアハアという いきづかい。

なにものだろう?

ヤギは じっと めを ひそめ、みみを そばだてた。コツン ズズ、コツン ズズー。

いっぽ いっぽ、かたい ものが ゆかを たたいて やってくる。

ひずめの おとだ。

なあんだ、それなら ヤギに ちがいない。

ヤギは ほっとして、そいつに こえを かけた。

「すごい あらしですね。」

「え? おや、こいつは ひつれい、ハア ハア、しやした。まっくらで、ちっとも、ハア ハア、きが つきやせんで。」

あいては ちょっと おどろいて、あらい いきで こたえる。

「わたしも、いま とびこんできたところですよ。」

しかし、こんなに ひどく なるとはね。」

「まったく。……おかげで あしは くじくし、おいらはもう さんざんですよ。ふう〜。」

あいては、やっと おおきく ためいきを つき、つえにし ていた ぼうきれを ゆかに おく。

と、いうことは……。

そう、その つえを ついて やってきた くろい かげは、ヤギではなく、オオカミだったのだ。とくに、この オオカミ、するどい きばを もち、ヤギの にくが だいこうぶつと きている。

「あなたが きてくれて、ほっとしましたよ。」

ヤギの ほうは、あいてが オオカミだとは、まだ きが つかない。

「そりゃあ、おいらだって、あらしの よるに、こんな こやにひとりぼっちじゃ、こころぼそく なっちゃいやすよ。」

どうやら オオカミの ほうも、あいてが ヤギだとは きづいていない。

「よっこらしよ。」

うっ……、いててて。」

「どうしました。」

「いやあ、ここに くるとき、ちょっと

あしをね。」

「そりゃあ たいへん。ほら、こっちに あしを のばしてくださいよ。」

「お、それじゃ ちょっくら

しつれいして、よいしょっと。」

オオカミが のばした

あしが チョンと ヤギの
こしに あたる。

ヤギは、
「あら? ひづめに しては、ずいぶん
やわらかいな。」
と おもったが、きっと いま あたったのは
ひぎなんだと おもいこむ。

「は、は、は、はくちよん!」
とつぜん、オオカミが おおきな くしゃみをした。
「だいじょうぶですか?」
「うっ……、どうやら はなかぜを ひいちまったらしい。」
「わたしですよ。おかげで ぜんぜん、においが わからないんです。」
「エへへ、いま わかるのは、おたがい こえだけって わけっすよね。」
「ハハハ、ほんとうですね。」

オオカミの わらいごえを きいて、ヤギは おもわず、
『オオカミみたいな すごみの ある ひくい おこえで。』と、いいかけたが、しつれ
いだと おもい、くちを とじる。

オオカミの ほうも、
『まるで ヤギみたいに かんたかい わらいかたでやんすね。』って い
おうと したが、そんなことを いったら あいてが
きを わるくすると おもい、やめることに する。

かぜの うなりごえと、こやに たたきつける あめの つぶが、かわりばんこに ひび
きわたる。

「どちらに おすまいで。」
「へえ、おいらは、バクバクだにの ほうでやす。」
「ええ!? バクバクだにですって? あっちの ほうは あぶくないですか?」

「へえ～、そうでやんすか? ま、ちょっと けわしいけれど、すみごちちは
いいでやんすよ。」バクバクだにとは、オオカミたちの いる たにである。

「ふーん、どきょうがあるんですね。わたしは サワサワやまの ほうですよ。」

「おーっ、そいつは うらやましい。そっちの ほうは、うまい くいものが たくさん あるじゃないすか。」

うまい くいものとは、ヤギの ことである。

「まあ、ふつうですよ、ハハハ。」

そのとき、ニひきの おなかが どうじに なる。

ぐう～。

「そういえば、はらが へりやしたね。」

「ほんとに。わたしも ペこペこですよ。」

「ああ、こんなとき、うまい えさがちかくに あつたらなあ。」

「わかります、わかります。わたしもいま、 おんなじことをおもってたんです。」

「そういえば、おいら、よく

サワサワやまの ふもとにある フカフカだにの あたりに、えさを たべに いきやすよ。」

「おや、ぐうぜん。わたしもですよ。」

「あそこの えさは、とくべつ うまいんすよねえ。」

「ええ、においも いいし。」

「やわらかいのに はごたえも いいっすから。」

「まいにち たべても あきないくらいですよね。」

「ほんと、いちど くったら、やみつきになっちまいやす。」

「うーん、その いいかた、ぴったりですよね。」

「ああ、おもいだしただけで たまらねえ。

よだれが でそう。」

「ああ、おもいっきり たべたい。」

そこで ニひきは どうじに、

「あの おいしい……。」

『くさ』と ヤギが いい、『にく』と オオカミが いった。

けれども、ガラガラと とおくで なった かみに、
ちょうど その こえは かきけされた。